専門性を生かした保育の展開

大学院学校教育研究科
幼児教育コース　教授
佐々木　晃

はじめに　時代の求める保育者の専門性

杉山教諭の5年目

２年保育４歳児１０月　初めての長縄跳び

文部科学省2019.3「幼児理解に基づいた評価」P101～　見てね

専門性を磨くとは？

保育者の専門性を構成する2つの要素

園長は真ん中
小さいじゃな
いですかー(怒)

A. 概念的知性

保育理論　記号的知性

B. 直感的応答力

直感　身体的知性

東京家政大学教授　加藤繁美先生

幼児期の教育は教科書のない教育

・体験をもとに、意味や概念と出会い、学んでいく教育の時期

・幼児期特有の記憶の仕方（幼児性健忘）

・発達の個人差

例えば、新入園の４歳児４月

４月生まれと1月生まれでは、小学4～2年生の違い（元上越教育大学教授　中沢和子）

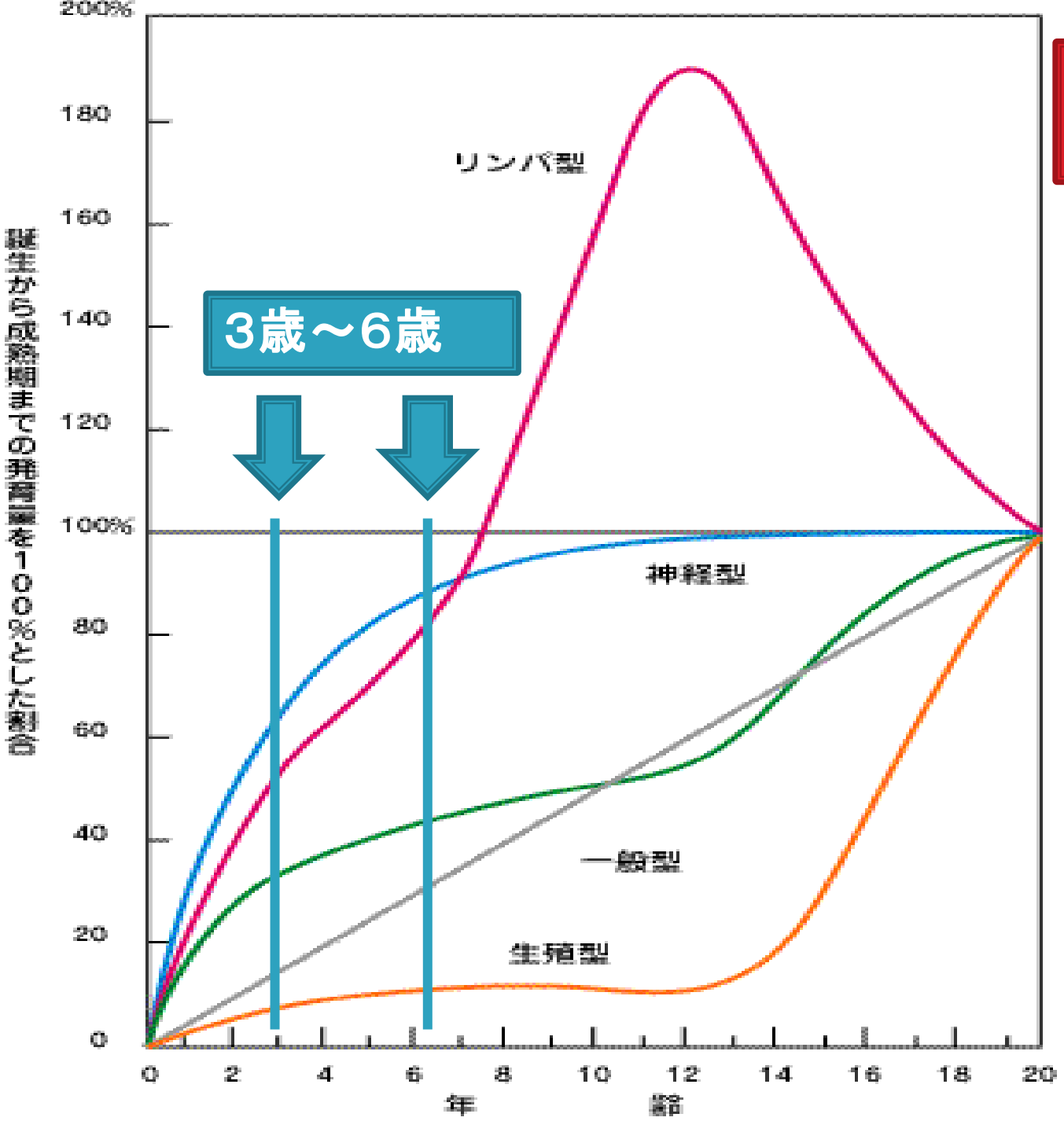
発達の特徴

１．幼児期ってどんな時代？

幼稚園教育要領解説より

〇身体が著しく発育するとともに，運動機能が急速に発達する時期。

〇身体的なものを手掛かりにして，自分自身のイメージを形成し，それに基づいて物事を受け止めている時期。


スキャモンの発達曲線
3歳～6歳
リンパ型
神経型
一般型
生殖型
誕生から成熟期までの発育量を100%とした割合
200%
180
160
140
120
100%
80
60
40
20
0
0
2
4
6
8
10
12
14
16
18
20
年齢

〇依存と自立の関係を十分に体験することにより，将来にわって人とかかわり，充実した生活を営む力をつける時期である。

〇信頼や憧れをもって見ている周囲の対象の言動や態度などを模倣したり，自分の行動にそのまま取り入れたりすることが多い時期である。

〇環境と能動的にかかわることを通して，周りの物事に対処し，人々と交渉する際の基本的な枠組みとなる事柄についての概念を形成する時期である。

〇他者とのかかわり合いの中で，様々なつまずきなどを体験することを通して，将来の善悪の判断につながる，やってよいことや悪いことの基本的な区別ができるようになる時期である

科学的な幼児教育の指導方法

保育マインドと保育メソッド

幼　児　教　育

↓

保　　育

養護

カウンセリング的側面

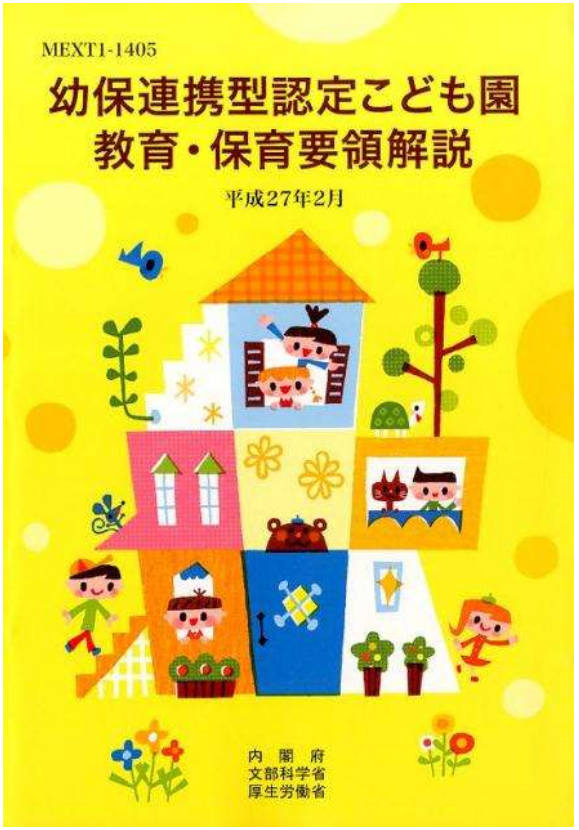
- 幼児を理解する
  - 心情・気持ち
  - 発　達
- 共感する

教育

ガイダンス的側面

- 直接かかわる
  - 言葉をかける・認める・励ます・促す・確認する
  - 話し合う・対話
  - 示す・教える
  - 手助けする
- 環境を構成する
- モデルになる（憧れの対象）

2. 幼稚園教育要領等、3法令の改訂のポイント



保育所保育指針改訂のポイント

- ０～２歳児の保育に関する記載の充実

  非認知的能力の芽生えを促す保育

- 保育所が幼児教育の場として積極的に位置づけられる

  保育内容や保育の計画・評価

- 環境の変化を踏まえた、健康・安全の記載が見直される

  災害への対応、食育の促進

- 家庭や地域と連携した子育て支援の必要性
- 職員の資質・専門性の向上

幼稚園教育要領等のポイント

①幼児教育で育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明記される

学校教育での接続のベースとなる3の柱

(1) 知識・技能の基礎

豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする

(2) 思考力・判断力・表現力等の基礎

気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする

(3) 学びに向かう力・人間性等

心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする

学校教育として接続
小学校以降との
つながりを踏まえて

②「カリキュラム・マネジメント」の確立が求められる

③「主体的・対話的で深い学び」の充実が求められる

④預かり保育と子育て支援の関わりが求められる

3. 教育の今日的課題を押さえて

平成26年11月　　中央教育審議会
「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」

子どもたちが成人する、近い将来
・生産年齢人口の一層の減少化
・グローバル化の進展と絶え間ない技術革新等
　社会の存り方そのものも大きく変化する可能性

厳しい挑戦の時代を乗り越え、
・伝統や文化に立脚し、
・高い志や意欲をもつ自立した人間
・他者と協働しながら価値の創造に挑み
未来を切り開いていく力が必要

教育のあり方も一層深化させる必要。
特に学ぶことと社会とのつながりを意識

★何を教えるかという知識の質・量の改善
★「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視
★「どのような力が身についたか」という学びの成果と恣意の視点が重要。

この子たち　22世紀少年の未来は？

かつて　教育」と言えば、単に生徒たちに何かを教えること」を意味していた。

しかし、今や　教育」と言えば、それは、　ますます不確かで、移ろいやすく、先が見えなくなっている社会という海で、自分たちが進むべき海路を見つけるために頼りとなるコンパスや航海術を生徒たちが確かに磨けるようにすること」を意味する。

OECD教育・スキル局長
アンドレスアス・シュライヒャー

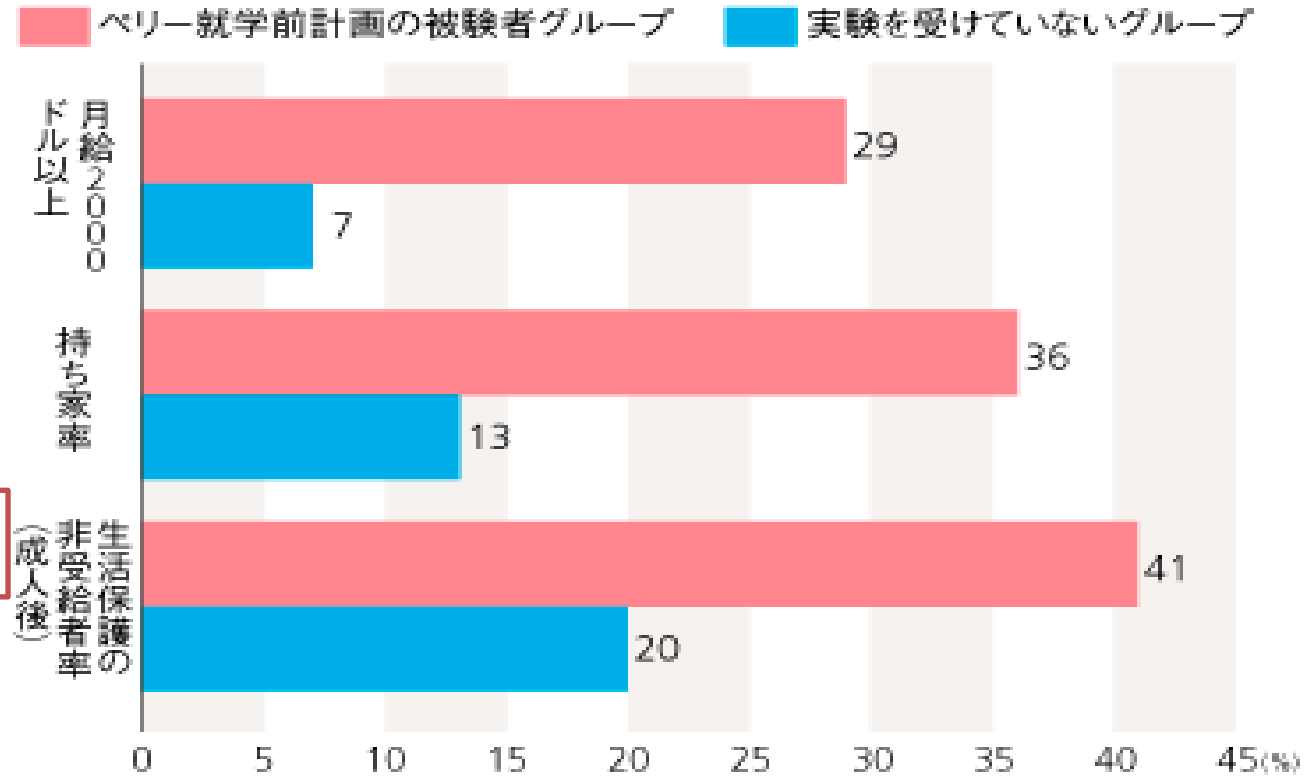
子どもたちをスマートフォンより賢くしたいと言うのであれば、

最新、幼児教育界のトピックス
幼児教育改革のベースとなっている理論

心情・意欲・態度の非認知的能力を育てる
日本の幼児教育実践は世界最先端

セサミ・ストリートより

図表［2］ペリー実験の経済効果



＊出典：James J. Heckman and Dimitriy V.Masterov. "The Productivity Argument for Investing in Young Children"（http://jenni.uchicago.edu/human-inequality/papers/Heckman_final_all_wp_2007-03-22c_jsb.pdf ／ 2009年2月25日確認）

幼児期に育つ大切な力とは？

ノーベル経済学賞(2000年)の受賞者、ジェームズ･ヘックマン教授の研究

IQ（知能指数）を長期的に高めることに、就学前教育による特段の効果は認められない、との報告がされている。

つまり、たとえ乳幼児期などの早い段階から教科学習を開始したとしても、長期的にIQを向上させるという面では効果が薄いということがわかった。

では、就学前教育・幼児教育の効果が最も顕著にあらわれたのは、一体どのような分野だったのでしょうか？

人間の能力は大きく認知能力（cognitive ability）と非認知能力（noncognitive ability）に区分できるが、「非認知能力」のとりわけ、幼児に対する就学前教育が重要である。

日本では、学習塾での入試教育、学力テストの成績あるいは知能指数=IQ（intelligence quotient）など、いわば「読み・書き・そろばん」的な物差しで子供の能力を図ろうとする傾向が強いようであるが、

「真面目さ、粘り強さ、自制心、忍耐力、気概、首尾一貫性」のような信頼できる人間性の涵養に繋がる就学前の幼児期教育こそが重要だ。というものです。

非認知的能力
社会情動的スキル

目標の達成
・忍耐力
・自己制御
・目標への情熱

他者との協力
・社交性
・敬意
・思いやり

情動の抑制
・自尊心
・楽観性
・自信

OECD作成「社会情動的スキルに関する報告書」社会情動的スキルのフレームワーク　2015.2

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

非認知能力

- 健康な心と体
- 自立心
- 協同性
- 道徳性・規範意識の芽生え
- 社会生活との関わり

認知能力

- 思考力の芽生え
- 自然との関わり・生命尊重
- 数量・図形、文字等への関心・感覚
- 言葉による伝え合い
- 豊かな感性と表現

幼児期の終わりまでに育ってほしい幼児の具体的な姿（※）

新教育要領のポイント

幼・小・中・高と「姿」でつなげる→可視化をはかり共有

4．遊びのちからを生かす保育
ー遊びはごちそう、学びは栄養ー

前の幼稚園教育要領「心情や意欲、態度<u>など</u>」の<u>など</u>の部分もクローズアップされたのが今回の改定のポイント

<u>知識・技能の基礎</u>

<u>思考力・判断力・表現力等の基礎</u>

学びに向かう力・人間性等

事例 「ロケット発射」

「遊び」が豊かになると,「学び」も豊かになる

「遊び」はごちそう・「学び」は栄養

遊びや暮らしの必要感→意欲
　→学びにつながる様々なものを引き寄せる

教科の視点から学びを整理すると‥

理科第４学年

Ａ　物質・エネルギー

(1)空気と水の性質

ア　閉じこめられた空気を圧すと、かさは小さくなるが、圧し返す力は大きくなること。

イ　閉じこめられた空気は圧し縮められるが、水は圧し縮められないこと。

遊びは総合的、成長は人間まるごとですが‥

「理科」という教科スプーンですくってもこれだけ豊かな学び

水力ロケット遊びをしている中で、幼児たちが体験的に得てきた知識として、次のようなことが共有されるようになっている

1、どんなペットボトルがよく飛ぶか

お茶の2リットルボトルが一番よく飛ぶ

2、入れる水の量はどれくらいがよいか

発射までの作業やポンプの空気入れ動作の間に減る量を考えると、満タンにしておくのがよい。発射時には3分の1くらいがベスト

3、一番うまくいくチームスタッフ

一番効率よくいくチームスタッフは、この事例のように4，5人という認識がある。ポンプ係、水汲み係、セッティング係がチームで素早く動くと、水漏れも少なく一番よく飛ぶとのこと

５．学びと育ちを見取る
―幼児の認知的・非認知的能力から―

事例　４．５歳児１０月

「おなかがすいてかわいそうよ」

園外保育で4歳児のユウカはカナヘビを捕えまえた。「きれいな色でしょう。うわぁ。かわいい。私、幼稚園につれて帰りたい。私のお友達にするの」と、芋掘りそっちのけでカナヘビを友達に見せたり手の上をはわせたりしている。　やがて彼女の周りに人だかりができた。

「やめろよ。バッタがかわいそうだろ」とリョウタ。「この子（カナヘビ）だつて、おなかがすいてかわいそうよ」ユウカが反論する。「このバッタは、もう死んでいるから、いいんじゃないの」サワコが応援する。

傍から年長児が保育者にも投げかけるように「でもな。幼稚園に連れて帰って、飼うっていうことは、ずっと虫や動物を餌にすることになるんだぞ」という。保育者は頷きながら議論を聞いている。

「カメの餌ではいけないの」とサワコが提案する。「わたし、死んだ虫とかカメの餌あげるから・・」ユウカも言うが、なお年長児は「勝手に連れていくのはいかん。ここで好きにさせておいてやれよ」とたしなめる。

「先生・・・」とユウカが意見を求めてくる。

「ぼくはいつも悩むんだ。今日のお芋も畑から掘って帰るしな。魚釣りするときはエビやゴカイを針にさして餌にするし、釣った魚も食べるし。う一ん。悩むよなあ。できるだけ無駄にとったりしないようにはしているし、頂いた命は『いただきます』って大事に食べてるけど、う一ん。難しい・・・悩むなあ」

そうしているうちに、ユウカはカナヘビを草むらに離した。「わたしがまた、遊びに来てあげるって、お話したの」ユウカは手を振っている。「ユウカちゃんは、カナヘビの気持ちもわかるんですか？」と保育者が聞くと、「うん、『連れて行って』って言ってなかったもん。まだ子どもだったのかなあ」と首をかしげて笑っている。

考察「何が育っているか？」

４歳時期になると、会話的行動が著しく発展し文構造も複雑化し、文脈に応じての語の選択も行われたりするなど、様々な表現が自由になってくる。また、自己のことばによる行動調整機能も発達してくる。

自己の発声に伴って、その行動を引き起こすことができるようになってくる。しかしながら、ことばによるセルフコントロールはまだまだ難しいところもある。

４歳児ユウカの場合は周囲の５歳児たちとのやりとりの中で、自分なりの意味づけを加えてカナヘビを放してやるという行動の抑制をしている。しかも、自分の文脈の中で自分の過去、現在、未来を明確に区分し、一連の出来事を時間的に順序立てて物語っていることがわかる。

保育者の指導内容

読み取る

ユウカの「きれいな色でしょう。うわぁ」とカナヘビに感嘆することばからは、彼女がこれまで、豊富に小さな動物たちとかかわってきていることがわかる。

カナヘビが捕まえられたという事実も、それを手に載せるという行為も、カナヘビの性質や特徴を知っているからできることであろう。その色や姿の美しさや不思議さへの驚嘆も、鋭い観察力があってのことである。

意図をもって見守る

食物連鎖や動物たちの自由を奪う飼育については教師自身考えさせられることが多い。

教師は、幼児たちがカナヘビへのかかわりや、自分たちの責任などについて議論する姿を大切にし、支持的に見守っている。それぞれの幼児が自分とは異なった見方や感じ方に出会い、自分ならどうするか、どうしたらよいかを迫られる心を揺さぶらせる実体験が尊いと思われるからである。

「ぼくはいつも悩む。・・」という教師のことばは、食物連鎖の問題を植物との関係をも含めた気づきまで広げるという意図がある。加えて、教師も同じように自分自身の生活の問題として誠実に考えていること、この問題が単純な「善い・悪い」の二元論ではなく、複雑で深遠な人間存在の哲学的テーマを含んでいることなど、生命と生命がかかわり合う場に立ち会いながら、人間が生きていくことの意味を伝えようとする願いが込められている。次第である。

共感し支持する

ユウカはカナヘビを草むらに放したが、その行為には生命への敬意や、それがより長くつづくようにとの積極的なかかわり方を選択した誇らしさが感じられる。また、「ユウカちゃんは、カナヘビの気持ちもわかるんですか？」との教師のことばは、問いというより、むしろ、そのようなユウカの気づきや、考え、「わたしが遊びに来てあげる」という、相手に合わせた行動や表現を考え出したことへの感嘆と敬意を込めている。

「『連れて行って』って言ってなかったもん。まだ子どもだったのかなあ」と首をかしげる彼女の様子に自尊心のような強いものが感じられる。驚嘆や強い欲求、対話や議論など生き生きとしたことばの交流を促し、その中で教師自身がことばの使い手としての自覚（責任）と工夫をもって生活する中で、幼児たちは生活の事実と結びつけながらことばの中身を習得していくことか確認される。

6. 非認知的能力を引き出す学級経営

- ポジティブルールでいこう！

ポジ

～しましょう

～したら、～できます

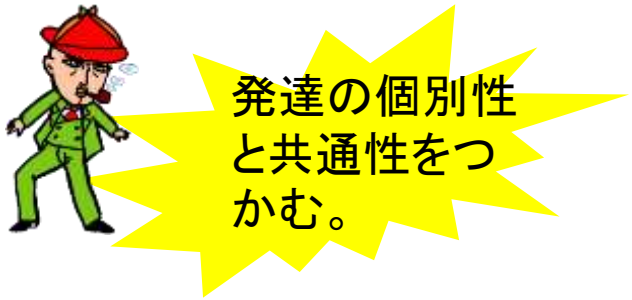
どうしたら、ほめられるか

ネガ

～してはいけません　ダメ！

～しないと、～できません

どうしたら、叱られないか



９月の指導のねらい

〇友達と思いや考えを出し合い、イメージを共有し、試行錯誤しながら、共に生活する喜びを味わう。

〇戸外で十分に身体を動かして遊ぶ。

指導の要点と環境構成の留意点（一部抜粋）

〇友達と思いや考えを出し合って、試行錯誤しながら遊びを進めていく姿励ましていく。

- 友達の考えや協力があると、遊びがより楽しくなっていくという気付きに共感しながら、相手に自分の思いや考えを表現しようとする意欲を励ましていく。
- 幼児が気付いたりつくったりしたルールや役割については実際に遊びの中で試す過程に付き合いながら、その必要感を一緒に確認していく。
- ルールや役割をめぐってのトラブルや口論の場面では、それぞれの意図と起こった結果がみえやすくなるように、周囲の友達と一緒に十分に話しを聞くようにするとともに、意図にその人らしさを見付けていく。
- 必要な用具や遊具材料などを幼児と一緒に準備したり確認したりしながら、幼児が分かりやすく準備や片付けがしやすい環境に整理していく。

いろいろな「らしさ」を見出しマネージメントしよう！

プロペラの飛行機

５歳児　９月１６日（火）～２２日（月）

登園してくるなりセイガは、「先生、昨日の『鳥人間コンテスト』のテレビ見た？」と、興奮した様子で私に話しかけてきた。

「ぼくも見たよ。すごい人力飛行機が出てきてたよな」と私が言うと、セイガは「オッケイ。ぼくも、今日、それつくるから」と、そそくさと持ち物の整理をすませて、材料倉庫に駆けていった。

「先生、なんか、ないかなあ。軽くて、ばきっと割れなくて、丁度良いやつ」セイガは保育室に帰ってきて、私にそう尋ねる。

「うーん。君がつくりたいのはどんな飛行機なの？」と私が聞くと、

「そりゃ。ぼくが乗れるやつだけど・・・」とセイガは少し思案している表情になる。

すると、傍にいたアツシが

「乗れるやつは無理だから、小さい模型ってことだろう」と言葉をつなぐ。

「オッケイ。そういうことよ。アッちゃんも。チームに入るか、ぼくらの？」とセイガはアツシや私を見回していった。

私たちは一瞬でチームスタッフにされてしまった。

「先生は、さっき言った材料の準備を頼む。ぼくとアッちゃんは設計図を描くぞ」
「おう」
アツシは裏の白い広告紙を、私は使えそうな材料を集めに走った。
その後、接着剤を乾かしながら設計図に沿って作業工程は進んでいった。関心をもって製作に参加してくる仲間が増えた。自分たちの飛行機ができつつあることが誇らしく、小さい組の子どもたちを誘い。見学ツアーを企画したりして、テレビなどから仕入れた飛行機づくりの蘊蓄を披露したりもした。

３日かけて、本体が仕上がると。セイガとユウキは「やっぱりプロペラはいるだろう。先生しかおらん。この仕事ができる人は」と私の手を握って重々しく言った。
「土日に探してくるけれど、もし、なかったときのことも考えておいてくれたまえ」と私も重々しく言って、二人の手を握り返した。

２２日（月）の朝一番、私の
用意したプロペラとゴムを見
つけたアツシは興奮気味に言う。
「これで、いける」
次々と登園してくる子どもたちは、
アツシにプロペラを見せられ、
アツシと同じように私の手を握りに来て言う、
「ありがとう。先生に一番に見せてあげる」
やがて、プロペラ付の飛行機は完成した。飛ばしてみると前のめりに墜落した。
「羽（主翼）がちゃんとしてないんだ。もっと前だろう」とか「風を計算するんだ」とか「もっと高いところから飛ばすんだ」「ぼくは飛行機の後ろを君は前を持って、２人パワーでいこう」など、代わる代わる飛ばしながら機体を微調整したり、飛ばし方や場所を工夫していった。

7. 面白さを科学する―環境の要因―

幼児が自ら遊誘財にかかわって生まれた遊びや生活について記録し、以下に示す6つの観点から保育カンファレンスの中で分析、考察し検討した。

①ものの性質や特徴の要因

②保育者の人的な要因

③子ども同士の要因

④時間的な要因

⑤場的・空間的要因

⑥イメージ・テーマの要因

おもしろさをつくる
遊びの構造

春を食す　5歳児　4月30日

　咲き終えたチューリップの茎①④を刈っておいたものを、女児達がままごと⑥に使っている。彼女たちがぐるっと囲んだ丸い電線ドラム②はキッチンテーブルで、中央の穴をガスコンロに見立てている⑥ことが分かる。
「ぽきってしたら、すじが剥ける」①とセリナが言うと、「筋とったら、あと水にさらしといてね」とリコがテンポ良くいう。「すみません、ちょっとアスパラいただきますね」とマキが水に入れる前の茎を何本かとっていく。「新鮮なうちにお料理してね。時間が勝負なの」とリコが言う。「はい」マキはユウカが砂や花びらを炒めるフライパンの中にそれを入れた。「火を最高に強くして」というユウカに応えてマキが調理台にしている電線ドラムの縁を⑤「がちゃがちゃして」ガスを強くする仕草をする。③

「さあ、あとはちらし寿司とスープだけね」リコは両手を腰に当てて身体をほぐすように軽いストレッチをしている。前にはボールの水にさらした茎がある。「あくが強いのよね、フキなんかは」とリコは時間がたつのを待っている。④

「スープ出来ました。ちょっと味見てみて」とセリナがカップ麺の容器に茎を浮かべて保育者に差し出した。保育者が香りをかぎ分ける仕草をすると、②
「特製スープには季節のお野菜が入っています。分かりますか」とたずねる。「この春らしい香りは？」と目を閉じて味わうように聞く②と、「はい。フキです。あとアスパラも入っています」という。「なるほど。その香りのハーモニーだったんですか」と保育者が言う②と、隣から「先生、お寿司はおすきですか？」とリコが尋ねる。「先生、ここのお寿司最高なんですの」とセリナがうっとりしたような表情でいう。

①ものの性質や特徴の要因

チューリップの茎の性質や本物のフライパンなどのままごと道具、調理台をイメージさせる電線ドラムなどがこれに当たる。

チューリップの茎が遊びの場に登場するまでの生活の過程も重要である。チューリップの茎を大切に使おうとする思いやその性質や特徴への理解が深まることで、遊びがより豊かになっていっていた。

②保育者の人的な要因

保育者は触感や音、見た目のフキやアスパラらしさを子どもたちが発見し共有していることを見取っている。

子どもたちとのやりとりの中で少し工夫を加えながら返している。例えば、「匂 い」という嗅覚的な感覚を、香りをかぎ分ける仕草で遊びの場に登場させている。子どもたちは、保育者とのかかわりを通じて、ごっこ遊びのリアリティーをつくり出すより多様な感覚の使い方、言葉、振る舞い、役割などの演出や場の構成といった、ごっこの虚構の世界を構成するものについても学ぶ機会を得ることになる。

③子ども同士の要因

　事例中のやりとりがこれにあたる。

　この応答のテンポが調理場の臨場感や緊迫感をつくりだしていることが分かる。使用している言葉も科学的な裏付けや論理性をもっているが、これも一種の遊びのルールのように共通 理解されているのだろう。

④時間的な要因

　チューリップの生長につき合い、遊びに活用するという、大きな意味での時間と、水にさ らしておいてあくを取るなどの、遊びをよりリアリティのある物にするために生成する時間が調和的に存在している。

⑤場的・空間的要因

　ままごと遊びの空間全体がそうであるが、道具としては電線ドラムや本物のフライパンや泡立て器などが、一層、「調理」という真実味を促して働いている。

⑥イメージ・テーマの要因

　ままごとや「調理」は、子ども達が日々目にしたり、かかわったりしているもので、すでに「何をどうする」という活動のイメージと具体的な知識を蓄え込んだものである。また、これが自分が大人になるなどの未来への期待と重なっているところも注目すべき点である。

遊び場面における6つの要因間の関係

現実の遊び場面で6つの要因がどのように関係しているのか

遊びの中では，①ものの性質・特徴の要因，②保育者の人的要因，③子ども同士の要因，④時間的な要因，⑤場的・空間的要因のそれぞれが密接に関わって⑥イメージ・テーマが形成され，遊びが発展し，そのイメージ・テーマが5つの要因とさらに関わる中でより洗練され，鮮明になることによって，逆に5つの要因がイメージ・テーマに影響されて，さらに密度の高い遊びが発展していくという関係が見いだせる。

遊びへの没入体験は学習や仕事に大切という科学的な根拠

脳が「没我」「集中」のフロー状態を好み、何度も再現したくなる

- ステュデオス（studios）状態

  人間がある状態において、生き生きと熱中している幸せな状態のこと

  東京芸大大学院映像研究科　佐藤昌彦教授　「ピタゴラスイッチ」監修

「これが好きだ！」「これが楽しい！」という充実した状態。この状態を体験せずに成長してくることの危惧。

遊び込めるにはわけがある

「遊ぶ」と「遊び込む」の違い
夢中になっている・
発展、継続している
遊びの素材を使いこなし我がものにしている

「保育の心もち」 秋田喜代美 2009 ひかりのくに

子どもたちは遊びの中で、興味や関心をもって様々な環境に働きかける。

すると、あたらしい発見がある。「こうすると、どうだろう」という推論が生まれる。

探求心をもってそれらにかかわりつづけ、体得した知識や技能を遊びや生活の中で使いながら、さらに発展させつつ、自分をも変容させていく。

8. カリキュラム・マネジメントのために

5歳児6月の指導計画

【幼児の姿】

○友達と誘い合って遊んだり、遊びに必要な人を呼び集めるなどして、仲間と一緒に生活する姿が多く見られるようになってくる。次第に自信をもって自分の思いや考えを友達に表現するようになり、主張の違いや遊びのイメージの違いからトラブルもよく起きるようになる。しかし、その中で友達とのやりとりについて試行錯誤しながら、多くの友達と共通のルールをもって遊びを楽めると、より楽しくなることが分かり、友達を誘ってルールのある遊びをするようになってくる。
○ザリガニつりや芋畑作りなどの交流をきっかけに、1年生との親密みもできてきて「○○さん」と名前を呼び合ったり誘い合ったりして活動するようになる。
○夏野菜や花の苗、飼育している虫や小動物などの生長や変化の様子に興味や関心をもちながら、世話をしたり、かかわって遊んだりする。また、興味をもったことや分からないことは図鑑を見たり、人に聞いたりして調べ、知り得たことを友達に教えて喜んでいる。
○竹・木・水・砂・土など自然物やいろいろな材料にかかわりながら、素材や用具の性質や使い方を工夫して遊ぶ姿が多くみられるようになる。遊ぶ中で「こうすると～になる」など、少し先のことに見通しをもって試すことが多くなってきている。
○雨の日に戸外へ出て、小動物を探したり、雨粒や雨垂れ、雨上がりの水溜まりや土で遊ぶなど、雨の日の遊びを楽しむ。
○家内でのリズム遊びやリズム劇なども楽しむようになり、友達と一緒にリズムやストーリーに合わせてリズミカルに動くことを楽しむ。

【ねらい】

○身近な動植物や自然の素材とかかわり、その特徴や特性に気付く。
○自分なりの課題をもち、友達と工夫しながら遊ぶ楽しさを味わう。

指導内容	指導の要点と環境の構成の留意点
○自分なりの課題や動きのイメージをもって工夫しながら遊ぶ楽しさを味わう。 ・戸外に出て、一輪車・木登り・アスレチック・鉄棒などをして遊ぶ。	○幼児が自分なりの課題や動きのイメージをもって、工夫している姿を認め、励ましていく。 ・「～したい」「もっと～になりたい」という気持ちを受け止めながら、イメージしたようにできずにつまづいているところを理解し、適当なについて一緒に考えていく。 り、手伝い合ったりしながて、自分や友達の変化への などの自然物やいろいろなにかかわりながら、素材や気付いたり、使い方や作りいけるようにする。 料を利用して、貼り絵やに組み紐などをつくる過程でわせ方、動かし方などを伝たりする。 ルを共有して遊びを楽めるう、環境を工夫する。 どを紹介し一緒に楽しむ。

5月の活動・題材例

園全体で取り組む活動

○親子遠足
さわやかな気候の中で、園外の自然に触れたり親しんだりしながら、歩いたり広い場所で思い切り身体を動かして遊ぶ心地よさを味わう。年長児は年少児らと手をつないで歩いたり一緒に遊んだりしながら、年長児としての意識をもてるようにする。また、保護者同士の親睦も図れるようにする。
○子どもの日
五月の空を泳ぐこいのぼりを見たり、自分達で作ったこいのぼりをあげたりする経験を通して、強さや雄大さに対する思いやあこがれが育つようにする。また、子どもの健康や成長に対する家族の願いに気づき、感謝の気持ちがもてるようにする。
○母の日
大好きなお母さんの仕事ぶりや、そこに込められた思いに触れられるようにする中で、自分は愛され守られているという安心感がもてるようにする。
○避難訓練
実際に災害が起こった時、保育者の指示に従って速やかな対応ができるよう、安全な避難の仕方を身につける。また、これを機会に地震や火事の恐ろしさや防火の大切さが分かるようにする。
○平面うえ　○誕生会　○家庭訪問

保育資料

	星組	月組	空組	山川組	園全体
歌	こいのぼりさん／こんぼぼさん／おかあさん	こいのぼり／／おしゃことりのうた	こいのぼり／／ふかあさん／おやぼとりのうた	おかあさん／たんぽぽ（歌・合奏）山のひんぷ／ことりのうた／	こいのぼり
手遊び	手ルル鬼ポン／をもち／ちょうち／たこ／きつね／きつね／まめ／	おこんのぺんぺんとうやぼおかい／ぱくもで	おやぼんとうぺんぺんとうぼかんもかあさのこんぺんとうぼ／おかいパンこな	おぺんとうぼこ／おちゃらか	おぺんとう
フォークダンス	ごあいきつ			セブン・ジェンプライ／シュー	
劇・オペレッタ					
わらべ歌・遊歌・伝承遊び	ぺ遊集ひ／おかんさん／おかんじめ／おかんめ／おごめ／おかん	のみこ／ハおお／ラ／ん／アそっ	お刀／ちん／ア／まんこの子／うかっム／ゆおにラ	息ごもス／陣かもの／んめいよ／けごなっ／ャ／ンめ／じりめん／ャかはま	

6月の環境プラン

今月の植物	望ましい体験						管理
		活動内容	3歳	4歳	5歳	備考	
【花】アジサイ・ハス・インパチェンス・オシロイバナ・ホオズキ・ゼラニウム・ペゴニア・シロツメクサ・バラ・ヤツデ・カタバミ・ガーデンラン・ランタナ・ナンリク・サフィニア・ペチュニア・ミミオシベル・ランタナ・パイナップルリリー・アガパンサス・スイレン・ホールーション・ケヤキ・ペンペンサ	育てる	○チャキチ・ジャガイモ・ニンジンの収穫 ○ウメの収穫 ○イチゴの取り入 ○ケヤキの支柱立て ○ハツカダイコンの種まき ○ポーチュラカ		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	カレーライスをつくる ジュース、シロップ作り 8月に収穫 おし種	○ツツジ・サツキ・アジサイ・レンゲショウの花の枯を摘わった後、刈り込み ○ケヤキを中心に樹木の病害（イラ蛾の幼虫他） ○アケボノ・ブクセンボクなどのネット張り ○ヘチマ・ジョウケンの支柱立て ○バラ・ツルバラの剪定 ○ラメの収穫 ○イチゴのランナー取り ○雑草の抜き
【葉】アカシア・アイ	遊ぶ	○紅葉を集める——バラ・ヤツデ ○実をとる——クヌギ・ムクロジ ○花束・冠作り・指輪作り——シロツメクサ ○葉を焼う——サルビア・ヤツデ ○色水づくり——フジ・ヤツデ・ライトウ・バラ・アカシア・オシロイバナ ○ロウ塗れ——アイ ○木登り——ヤクラ・カスノキ・ムクノキ ○鳥とり——ヤクラ					

月別指導計画の見直し

・相手の思いや考えを感じながら最後まで話を聞いたり、分からないことは尋ねたりする。
・友達に自分の考えや体験、絵本などの物語などを話したり、友達の話や話し方などに関心をもつ。
・テーマや登場物をはじめとして、自分達でストーリーを考えて絵本や紙芝居・ペープサートなどをつくったり表現したりする。

〇冬の自然に親しみ、生活や遊びに生かして活動する。
・雪や氷などに関心をもち、触れたり、比べたり、実験したりする。
・凧や風輪など、風を利用して遊んだり、北風を体感したりする。
・暖かく過ごす工夫を保育者と一緒にしながら、身の回りにあるいろいろな道具や用具、衣類などの仕組みや便利さについて気づいていく。

５歳児１月の指導計画

【幼児の姿】

〇縄跳びやこままわし、一輪車乗りなど、自分なりの課題をもって挑戦したり、友達と教え合ったり励まし合ったりして、やり遂げようとする姿が多くみられるようになる。
〇遊びの中の必要から、友達同士の意見の交流が盛んになり、遊びがより面白くなるように、ルールや遊び方を相談しながら工夫するようになる。
〇室内で遊ぶことの割合も多くなり、劇遊びや絵本・紙芝居作りなどのように友達と言葉や身体の動きを考えたり、工夫してつくり上げていったりする遊びが多くなってくる。
〇１年生と一緒にカレンダーを作った体験などから、カレンダーなどを用いて日程に関心をもちながら遊びや生活の計画を立て、準備をしたり、行事を楽しみに待ったりするようになる。また、新しい年（２００９年、平成３０年という言葉）を迎えたことや、干支「戌」にも関心をもつようになる。
〇氷や雪・霜・北風など、自然の現象に興味をもち、触れて遊びながらそのものの性質に気付いていく。
〇すごろくやトランプ、絵本や紙芝居など、数や文字などに関心が高まり、それらを使って遊ぼうとする。

【ねらい】

〇共通の目的に向かって話し合い、工夫しながら遊ぶ中で、友達の良さに気付く。
〇自分の得意なことを生かして遊びを面白くしようとする。
〇人の話をよく聞き、相手に分かるように話す。

指導内容	指導の要点と環境の構成の留意点
〇共通の目的や見通しをもって工夫して遊ぶ楽しさを味わう。 ・友達と一緒に自分の意見を言ったり友達の考えを聞いたりする。 ・遊びのルールや遊び方を友達に伝えたり、一緒に考えたりする。 ・友達と誘い合ったり、必要に応じて遊びに加わってもらうなどして遊ぶ。 ・友達と一緒に遊んだり１年生と活動の相談をするとき、曜日や行事予定などを意識しながら計画したり遊びを進めたりする。 ・相手の考えや動きを予想したり、自分の進め方に見通しを	〇共通の目的や見通しをもって、友達と一緒に工夫して遊ぶ楽しさが味わえるよう援助する。 ・友達と一緒にかいたりつくったりする過程で、いろいろな表現方法が試せたり、いろいろな組み合わせができたりするような道具や材料などを、幼児と一緒に用意する。 ・友達と一緒に作ったり遊んだりする時、曜日や行事予定などを意識しながら計画したり遊びを進めたりできるよう、ミーティングなどでは、カレンダーなどを利用して計画を立てたり、見通しについて話し合ったりしていく。 ・将棋やオセロ・トランプ・すごろくなどのゲームを身近に置き、幼児達と一緒に楽しみながら、ルールをつくったり遊び方を考えたりする。 ・集合数や順序数といった数のもつ性質のおもしろさや不思議さなどへの気づきや発見・疑問などに共感しながら、幼児の探究心や生活の中で使おうとする姿を励ましていく。

事例3「すごろく」5歳児１月
〈数量・図形、標識や文字などへの関心・感覚〉

ユウタとツグミが模造紙にすごろくをかき始めた。ユウタは「スタート」の文字を太く塗っている。

ツグミは線を少しのばしてはアイスクリームのカップを使って丸をかき、1、2、3と数字を増やしながらつなげている。ツグミが11までかいたとき、急にユウタが、「そんなの、おかしいよ。9や10がふたつもあるの、おかしい」と言い出す。ユウタは「スタート」の近くに9、10、11と自分で狭いますをたくさん作り、ぎっしりと数字を書いている。

ユウタは「たのむ。そっち消してくれ」と言うが、ツグミは、いやだという。「たのむから」とユウタが繰り返して頼むと、ツグミは自分のかいた数字に×を付けている。

ツグミの顔が曇ってきた。
保育者はすごろくのところに行くと、座って、「頼まれたって、いやなんだろ」とツグミの方を見て言った。
ツグミはうんとうなずく。「どんなすごろくにしたいの」と保育者が聞くと、「おかしくない、すごろく」とユウタがいう。ツグミは「だって、ぼくんちのすごろくは、近道や仕掛け道やいろいろな道があるもの」と言う。
保育者が「8の次は9で、どっちの道も、9、10、11とちゃんと続いているけどいけないのかなあ」と話していると、そばでコマを回していたサトシが近付いてきた。
「ここ（8）でちょうど止まったら、どっちに行くか決めるといいよ。で、どっちがお得なの？」と指差しながら言う。ユウタは「こつちが、仕掛けがいっぱいあって、お得です」という。「こつちの方が、はやいし、お化けや怪獣があってお得です」とツグミがいう。二人は競うようにして数字をつなげていく。

ツグミが模造紙の「スタート」の対角まで先に行き、「ゴール」をおいた。ずいぶん遅れて、ユウタはツグミの3倍もコマ数の多い道をそのゴールにつなげた。ツグミは「ここで止まったら、ユウタくんの25にワープします」といって、自分のかいた25番のところから矢印をかいて、ユウタのものにつなげた。

今度はユウタが「ここで止まったら、ツグミ君のところにいけます」と自分の29から、ツグミの30のところへ滑り台のようなものをかいてつなげている。やがて二人は、「すっごく、おもしろいから、先生もやってみない」と保育者を誘いにきた。

考　察
「数量や図形、標識や文字等への関心・感覚」の観点から

幼児は遊びや生活の中で、数や量などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりしていきます。また、必要感からこれらを活用するようになると、「数量や図形、標識や文字等への関心・感覚」は一層高まるようになってくる。

事例は、「出たさいころの目だけ進める」という量（集合数）としての性質と、8、9、10、11と、数が順に並ぶ順序数の性質が表れている。ユウタは、すごろくの、8の次の9はただひとつでないと、ゲームがおかしくなると考えてこだわっていたようだ。

しかし、周囲の人の意見を聞き、やりとりする過程で、数字は記号として抽象化された概念があることに気付き始めている。

自分だけの唯一無二の「８」ではなく、誰もが共有できる8番目という順序数であるという、一般化・客観化された性質に出くわす体験を得たようだ。

そして、順序数の約束にのっとると、共同しながら、それぞれが自分なりにすごろくをつくっていけることを知った。

サトシの「ここ（8）でちょうど止まったら、どっちに行くか決めるといいよ。で、どっちがお得なの？」という助言はそのような数の特性への気付きを促しているようだ。

遊びや生活の中で自然に育っている「かしこさ」
ー図形感覚の例ー

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の発達のプロセスを把握し
それらが促される遊びや環境の構成を工夫する。

①形を見つける。意味づける

「せんせい　ほら、ハート型」「これ　見て。この石の形、タマゴみたいでしょ」、石の中から特徴のある形を見つけ出す。
様々なものを自分の既知のものと関連付けたりまとまりをもたせたりして意味付けする。

左右対称の模様や規則性のある模様なども、「わぁ、きれい」と思わず感嘆の声が漏れることが多い。
幼児たちにパターンとしての美しさや形としての美しさ、正確である美しさなどの**審美的な感性**が備わっていることが推察される。

②形を作り出す体験

自分の手で意味のある形を生み出していることを喜ぶ。

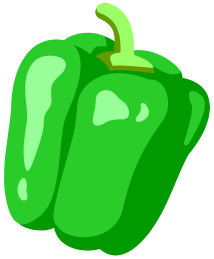
一つの形から他の形を作り出す**「変貌の経験」**にもつながっていく。リボンを回して輪を描いたり、コンパスのように棒の一方を固定して回転させて丸を描いたり様々な操作で異なった形や価値を生み出していく。

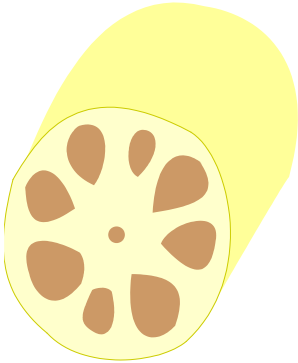
③ものの前後や左右など位置を捉える
ー空間の相対的位置や構成を認識するー

思う存分、身体を動かして遊んでいる。狭いところを身体を曲げてくぐったり、這ったり、横向きで進んだりなど、空間に合わせて様々に姿勢を変えて動いている。

造形的な活動の中でも、裏返したり、画用紙や折り紙などをいろいろな方向や角度、割合（例えば3等分に折るなど）に折ったり展開したりする。

④立方体から平面へと視点を移す体験
ー立方体を触り、眺める経験から平面へと進むー





事例「まほうのかげ」の影やコップの「わっか」跡など。
ものを見る視点を変えると、ものの形が異なって見えるおもしろさに幼児たちを誘っている。

様々な立体的なものに触れながら、型を押したり、よく眺めたりする体験は、形を平面的に捉えたり描いたりする感覚や技術を促すことにつながる。

「あれっ。おもしろい、これっ」と思えるような視点を幼児と一緒に見つけ出すことも幼児の感覚を促すポイント。

⑤箱などを壊し展開する。
立方体を平面に→立体をつくる、入れ物をつくる。

箱などを壊して展開したり、組み立てたりする遊びを喜ぶ。
5歳児になると折り紙で箱をつくったり、節分には升を折ったりする体験などもする。

立体的な箱を繰り返し展開させたり、紙を折って入れ物をつくったりすることは、平面的なものと立体的なものとの間に介在する法則性をそのまま体感しているといえる。

⑥形の同一性を知る

幼児たちはものを集めることを好む。また、それらを自分たちなりのルールや秩序で並べたり、種類ごとに分けたりする。同じ種類のものを並べる遊びの中では、それが**どれも同じような形**だと分かる。

片付けに関しても同様の感覚が発揮され、同じような形の皿や容器などを細かく分類整理することも「片付け上手」のプライドをくすぐっている。このような**形の同一性**や用途ごとの**仲間分け**は、遊具や用具の棚やかごの配置、その表示の仕方などで「分かりやすい環境」「使いよい環境」となるかどうかが決まってくる。

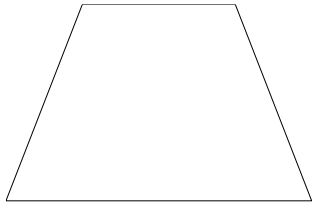
⑦単位の利用

積み木を積み上げて「家」という造形物全体を構成するような遊びは、「**単位**」やその「**まとまり**」や「**全体**」の関係を体感できる活動といえる。
積木やレゴや牛乳パックなどで大きなものの形をつくる場合、その個々のパーツを一つの単位として全体の形を構成していくのだが、幼児たちは同じような形のものをイメージして表現したいものを形づくったり、遊びの展開の中で分解したりしながら形の構成の仕組みやおもしろさに触れていく。

⑧接続期の合同保育／授業の例　ー形ー
「形を見つけよう」

幼児たちは、１年生が園内の様々な遊具や空き容器等を集めてくる様子を興味深く見ながら、自分たちなりにかかわりをもっていった。「丸いものは転がりやすい」とか「積み木のようなもの（立方体）は積み上げやすい」「三角積み木の斜面は滑り台にできる」など実感しながら、１年生の使う三角や四角、丸、菱形などのことばに触れて実際のものの形を形容していった。

「台形は三角の仲間か？
四角の仲間か？」



「三角おにぎりの先を食べたみたいに無くなっているから三角の仲間」、いや「四角がつぶれて変になっているから四角。だって菱形もそうだもん」と言い合って譲らない幼児に、１年生が「ほら、四つ角（かど）があるだろう。だから四角なんだ」と説明している。四角形がもつ形の特徴をわかりやすく幼児に説明する姿に保育者たちも感心した。四角形の意味を的確に把握している。

１年生たちの中に形の概念がつくられ、それを説明することばをもってさらに自分自身の認識を深め、自信めいた様子も伺えた。図形の感覚や認識においても、少し先をいく１年生と考えを引き寄せて納得できる年長児とのかかわりの中では、「こうだから、こういえる」という帰納的な思考がことばとなって現れ、両者の思考や推論が活発になっていた。この時期の合同保育／授業の互恵性の一つであるといえる。

ご清聴
ありがとうございました

令和元年度幼児教育研究会

開催日：令和元年11月9日（土）
研修主題：遊誘財から豊かな遊びを創り出すために V
ードキュメンテーションで綴る保育の「質」の評価ー

(C)2017.yuika mama